

日本宗教学会 第73回学術大会

パネル発表要旨集

日時・会場

平成2014年9月12日（金）-14日（日）（パネル発表は13日（土）と14日（日）の午後）
同志社大学 今出川キャンパス 良心館（RY）

開催パネル一覧

日	部会	教室	パネル題目	代表者
13	4	404	ローマ帝国における諸民族と宗教	市川 裕
	5	405	変革期の社会における他宗教理解	塩尻 和子
	8	408	井筒俊彦の「東洋哲学」への宗教学的視座	澤井 義次
	11	303	欧州におけるホスピス・緩和ケアの展開と宗教のかかわり	竹之内裕文
	13	305	宗教多元時代における宗教間教育の実践とその課題	那須 英勝
	14	306	被災地における心霊体験とその意味について	相澤 出
14	1	401	宗教学誕生期の再検討—ミューラーからデュルケームまで—	江川 純一
	2	402	内村鑑三における「二元論」問題再考—矛盾と並存をめぐって—	岩野 祐介
	3	403	真理・政治・普遍性—ポスト世俗化時代における神学の真理性—	佐藤 啓介
	4	404	新たなキリシタン史構築を目指して—通史的視座からの試み—	狭間 芳樹
	5	405	宗教における「自由」「平等」—宗教の学際的研究に向けて—	勝又 悦子
	6	406	人口減少社会における寺院仏教の役割—浄土真宗寺院を事例に—	櫻井 義秀
	7	407	仏教から見た宗教間対話の可能性	藤 能成
	8	408	日本のカトリック教会の在日外国人支援にみる「多文化共生」	高橋 典史
	9	301	近代日本の修養・精神療法・新宗教における身体論と国家論	吉永 進一
	10	302	宗教研究として「身心変容技法」研究が問いかけるもの	鎌田 東二
	11	303	宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連	松島 公望
	12	304	聖地における「聖性」の多元化とその葛藤をめぐって	山中 弘
	13	305	宗教メディアの近代	大谷 栄一
	14	306	新しい宗教研究の地平を拓く—「実践」という場から—	弓山 達也

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載するのを原則としています。

ローマ帝国における諸民族と宗教

祭司的ユダヤ教からラビ・ユダヤ教へ
共和政ローマの宗教
ローマ法と宗教
初期キリスト教とローマ帝国
ユリアヌスとキリスト教ローマ帝国

代表者： 市川 裕
市川 裕 (東大)
小堀 馨子 (成城大)
葛西 康徳 (東大)
土居 由美 (立教大)
中西 恭子 (明治学院大)
司会： 市川 裕 (東大)

本企画は、代表者を中心に取り組んでいる科学研究費助成研究「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」の一環として、古代ローマ帝国における一神教の出現と発展を宗教史的、法制史的、思想史的な観点から総合的に分析するものである。

ユダヤ教・キリスト教・イスラームという3つの唯一神教は、その国家宗教関係に着目するとき、キリスト教が国家と教会の二元的支配構造を持つものに対して、ユダヤ・イスラームは啓示法に基づく政教一致の支配構造を持つという点で大きな基本的相違がある。その起源を遡るとき、古代ユダヤ社会においてキリスト教とラビ・ユダヤ教が分離、成立する時代に行き着く。異邦人キリスト教は、ローマ世界において信仰共同体として根付いていくのに対して、ラビ・ユダヤ教は西暦3世紀初頭にハラハー(ユダヤ啓示法)の宗教として再生した。

ローマ帝国を舞台に登場した異邦人キリスト教とラビ・ユダヤ教の2つの共同体は、ローマ帝国の中において独自の共同体を形成する過程で、ローマ社会が念頭に置いていた宗教共同体とは趣を異にする共同体を理念として持っていた。そのために、政治的軋轢が迫害や戦争に発展することになったが、その過程で、ローマ帝国の国制に対して少なからぬ影響を及ぼしていたことも見逃すことはできない。

ローマ帝国がキリスト教化する過程で、宗教と国家との関係が大きく変化することに鑑みて、ローマの伝統宗教、ユダヤ教、キリスト教がどのように自己の共同体性を理解しているか、そしてそれがローマ法とユダヤ法の宗教共同体に対する捉え方とどのような関係を持つかに注目しつつ、古代末期に向けた宗教史の全体像に迫ることを課題とする。

以上のような観点からの総合研究はこれまで行われたことは少ないと思われるが、世界宗教史を通覧するとき、古代ローマ帝国時代に、宗教観が一変する事態がどのように展開したのかを理解することは、その後

の世界宗教史の展開にとって不可欠の知見を提供するものである。今回は、一神教とはいえその共同体理論が互いに異なるユダヤ教とキリスト教がローマ社会特有の国家・宗教関係とどのように対峙することになったか、という点に考察の焦点を絞り、問題点を指摘しつつ一石を投ずることを目指している。

5名の発表者の内容はそれぞれ以下ようになる。

市川裕は、古代ユダヤ教が神殿と祭儀を中心とする祭司的宗教から啓示法ハラハーの宗教へ発展する推移を、ローマ帝国とユダヤの二つの戦争をはさんだ宗教史の流れに沿って提示し、合わせて本企画全体の課題提供を行う。

小堀馨子は、共和政ローマにおける宗教観に焦点を当て、キリスト教化する以前のローマ宗教の特徴を考察するが、本発表においては、ローマ宗教の中心概念である「レリギオ」を主としてケクロに依拠して扱う。

葛西康徳は、ローマ法研究の立場から、法と宗教が国制上分離することを当然の前提とする法体系において、帝国全体に市民権を付与するに際してキリスト教共同体とユダヤ共同体に対してどのような対応を取ったかを主として扱う。

土居由美は、初期キリスト教がその最初期におけるユダヤ的共同体から自己を分離して、ローマ社会の異邦人共同体としてローマ帝国と対峙するに至る過程に注目して、キリスト教の宗教観とローマ社会のそれとの対比を扱う。

中西恭子はローマ帝国がキリスト教ローマ帝国へと変貌を遂げた時代において、古典的異教復興を掲げたユリアヌスとコンスタンティヌス朝期の宗教政策との比較論を扱う。

変革期の社会における他宗教理解

※国際パネル・英語使用

	代表者： 塩尻 和子
トルコにおける宗教多元主義とイスラーム運動	アドナン・アスラン (スレイマン・シャー大)
中国における回族の立場とイスラーム研究	哈 宝玉 (陝西師範大学)
戦前日本におけるイスラーム受容	四戸 潤弥 (同志社大)
イスラーム社会における宗教的マイノリティ	岩崎 真紀 (筑波大)
宗教間対話運動と日本のイスラーム理解	塩尻 和子 (東京国際大)
	司会： 塩尻 和子 (東京国際大)

どの宗教も社会との関係性を保ちながら、社会の変動や近代化、グローバル化に対応して多様な様相を示している。とくに、精神性と日常性が不可分の形態をもつイスラームでは、信仰生活は社会生活そのものであることから、イスラームは社会の多様性にあわせて変化をしてきた。ここ2, 30年間のイスラーム復興運動による政治的宗教運動の激化によって、イスラーム研究では政治的視点が強調され、テロや紛争をテーマとする研究が大勢を占めた。しかし最近の民衆運動においては、政治的イスラームは影を潜め、普通の市民が主役となって社会変革が起こされている。これまで十分に研究されなかった「市民宗教」としてのイスラームが担う新たな役割と課題を、イスラーム国でありながら世俗主義を国是とするトルコと、イスラーム教徒が回族と呼ばれ、少数民族の一翼を担う中国の事例について発表をし、国際的な宗教間対話の観点とイスラーム社会のマイノリティとの対話と共存、そして、日本の宗教環境のもとで続けられるイスラームとの対話について、取り上げるパネルとする。

アドナン・アスラン教授は、宗教多元主義の専門家の立場から、トルコにおける民衆的な宗教回帰運動と、世界的に拡大したヒズメット運動との関連と、将来像について、研究成果を発表する。特に非政治的な運動として展開しているヒズメット運動が世界各地で大きな成果をあげる一方で、トルコ国内では、政権与党による締め付けが厳しくなっていることを、取り上げて、世俗社会におけるイスラームの民衆運動の本質について、発表をする。

中国の哈宝玉教授は、現代中国のイスラーム、及びイスラーム教徒の現状と信仰と、将来像について研究成果を発表してもらうとともに、自身も回族である立場から中国のムスリムの将来像を語ってもらう。特に、ウイグル自治区などでのイスラーム教徒による反政府活動と、回族の活動との対比を検討しながら、解説をする。

四戸潤弥教授は、これまで日本におけるイスラーム理解は、明治から今日まで非イスラーム教徒の日本人学者、研究者、ジャーナリストの著作、翻訳書を通じてなされてきたと言える。そうした中であって、アフマド有賀は聖典『クルアーン』の共同訳者として監修、修正を行ってイスラーム教義を伝えようとし、またイスラーム紹介の一連の小冊子を著作、刊行した。発表は、アフマド有賀を日本人イスラーム教徒の研究者、学者の系譜的先駆者として捉え、彼の著作活動の評価を通じて、現代日本人イスラーム教徒たちの知的研究活動のあり方を提示し、今後の方向性に言及する。

岩崎真紀助教は、イスラーム世界に存在する少数派のキリスト教諸派、非カルケドン派などの実態を現地調査に基づいて明らかにし、変革期を迎えて、政治的に民主化要求が高くなるイスラーム社会の中で、逆説的に生じるムスリムとの確執の現状とその要因を明らかにし、多文化共生の可能性を探る研究を発表する。

塩尻和子は、世界各地で開催されている宗教間対話活動の目的とその意義を紹介しつつ、とかく一神教を批判的に把握する傾向のある日本の独自の一神教観を検討し、イスラームについての誤解の原因となるものを検証する。最近になって徐々に活動が開始されている日本の宗教間対話活動とイスラームとの対話の試みを検討し、日本における多文化共生社会の構築へむかう研究への提言を行う。

なお会場で英語発表のハンドアウトとともに、日本語訳も配布する。

井筒俊彦の「東洋哲学」への宗教学的視座

※日本宗教研究諸学会連合 後援

代表者： 澤井 義次

井筒「東洋哲学」の哲学的視座	氣多 雅子	(京大)
井筒「東洋哲学」における言語とその意味	ロペス・パソス・ファン・ホセ	(龍大)
井筒の思索における華嚴的な世界	安藤 礼二	(多摩美術大)
井筒のイスラーム理解と流出論	鎌田 繁	(東大)
コメンテータ・司会：	澤井 義次	(天理大)

東洋思想・イスラーム哲学研究で知られる井筒俊彦は、世界の諸宗教思想に精通したうえで、独自の「東洋哲学」を構想した。彼は東洋の主要な思想テキストを意味論的に読むことによって、「東洋哲学」という思想空間を創出しようと試みた。本パネルでは、井筒のそうした哲学的思惟の特徴を明らかにするとともに、彼の「東洋哲学」が抱える諸課題について、宗教学的視座から検討したい。

まず、氣多は井筒俊彦の「東洋哲学」を宗教学的視座から検討するために、井筒の「東洋哲学」を形成している哲学的視座の特質を明らかにしようとする。井筒がめざしたのは「東洋哲学全体に通底する共時論的構造の把握」であるが、そのために彼は、伝統的思想のテキストを創造的かつ未来志向的に読み解いて、そこに含まれている哲学思想的可能性を追究するという態度をとる。この態度にはいくつかの特徴がある。まず、テキストが伝統的思想のテキストであることが常に意識されており、その上で、現代の視点からそのテキストが読み解かれ、また、他の伝統的思想のテキストと比較されるが、その読解と比較のなかから、読解し比較する井筒自身が躍り出る。井筒の思索の仕方は、彼の思索が向かった「東洋」の思想伝統における体験と思索のあり方に呼応するものであったと考えられ、氣多はこの辺りの事態を考察しようとする。

氣多の議論を踏まえて、ロペス・パソスは井筒俊彦の「東洋哲学」を理解するうえで不可欠な側面、すなわち、言語とその意味に注目する。井筒哲学の名言にもなっている「存在はコトバ」とか「神はコトバ」などの表現が示唆するように、言語は井筒哲学の中心的な位置を占めている。井筒によれば、言語の意味分節機能は存在するものの全てを創り出す。さらには、存在そのものは言語(コトバ)にほかならない。このようにロペス・パソスは井筒哲学における言語の意味をめぐって、井筒「東洋哲学」における言語の意味理解の重要性を明らかにしようとする。

次に安藤は、井筒が凝視し続けた「東洋哲学」の核

心、華嚴的な世界の諸相を浮かび上がらせようとする。井筒はエラノス会議への参加を通じて、徐々に「私の東洋」を発見していったと思われる。その成果は井筒の代表作『意識と本質』として結晶する。『意識と本質』では、「本質」を徹底的に否定する禅と「本質」をイメージとして肯定する密教という、列島に将来された仏教が磨き上げてきた二つの対照的な意識探究の方法が論じられる。井筒にとって禅と密教、道元の無彩色の教えと空海の極彩色の教えは、華嚴的な光の世界の顕現として一つに重なり合うはずのものであった。井筒はその華嚴的な世界を描出するにあたって、「私の無垢なる原点」と位置づけた『神秘哲学』の結論部分で論じられたプロティノスのヴィジョンを引く。安藤は井筒が『神秘哲学』から『意識と本質』を経て、最晩年の論考や対談に至るまで凝視し続けた華嚴的な世界の諸相を明らかにしようとする。

最後に、鎌田は井筒の流出論的思索への関心をとりあげる。井筒のイスラーム研究は、クルアーンの意味論的研究と哲学や神秘思想の研究とに大きく分けることができる。このうち哲学・神秘思想の研究は『神秘哲学』に代表される初期の著作や『意識と本質』に結果する晩年の仕事とひとつながりに見ることの可能な仕事であり、広い意味での流出論的思索への強い関心を共有する。しかし、クルアーンの意味論的研究はこの文脈には入らないように思え、このふたつの研究方向をどのように理解するかは井筒のイスラーム理解全体を考える上でひとつの鍵となろう。

以上、井筒「東洋哲学」のおもな特徴を中心として、井筒の哲学的思惟を宗教学的視座から掘り下げて研究することによって、近年、わが国ばかりでなく世界的にも注目されている井筒「東洋哲学」の構造を明らかにすることができるであろう。

欧州におけるホスピス・緩和ケアの展開と宗教のかかわり

代表者： 竹之内裕文

欧州におけるホスピス・緩和ケアの展開をどう読み解くか	竹之内裕文	(静岡大)
「ホスピスの世俗化」言説とその背景	諸岡 了介	(島根大)
フランスの看取りにおけるライシテとスピリチュアリティの拮抗	伊達 聖伸	(上智大)
スピリチュアルケアと宗教—欧州・日本の緩和ケア実践から—	坂井さゆり	(新潟大)
司会：	竹之内裕文	(静岡大)

よく知られているように、終末期ケアのあり方は、20世紀後半に大きく変化した。19世紀半ばのアイランドに蒔かれたホスピス運動の種子は、まず英国のC. ソンダースによって育てられ、次いでカナダでは、同じ種子が「緩和ケア palliative care」として成長し、ホスピス・緩和ケアは今や、世界中で豊かな実りをみせている。ホスピス・緩和ケアは、終末期ケアの改善に貢献しただけでなく、標準的なケアプログラムにも波及的な効果を与え、ヘルスケアの質的向上に広く影響を及ぼしてきた。

しかしホスピス・緩和ケアの確立と普及とともに、前述のホスピス運動を主導してきた問題意識が、宗教的なそれを中心に、希薄になりつつあるように見受けられる。こうした事態を、私たちは宗教とのかかわりにおいて、どのように読み解いたらよいのか。本パネルでは、欧州諸国におけるスピリチュアルケアの近年の動向に着目し、これを足がかりにホスピス・緩和ケアと宗教の関係に迫っていく。

なるほど「スピリチュアリティの興隆」については、本学会でも、個人・社会レベルでの意識の変化という視角から宗教学的・社会学的な検討が加えられてきた。しかし「スピリチュアルケアの興隆」については、その宗教的背景や宗教学的含意を含めて、十分な討議が進められてきたとはいえない。ホスピス・緩和ケアの専門領域に目を転じて、そこでは米国を中心に、海外からスピリチュアルケアの実践と理論が移入されてきたが、その際、スピリチュアルケアの実践と理論が当該国・地域の社会的・文化的背景から切除され、とりわけ宗教的背景が素通りされたまま、専ら「技法」として紹介されてきた感を否認しない。「スピリチュアリティ」と「スピリチュアルケア」をめぐる2つの考察は、相互に照らし合うことも、そこから統合的な像を結ぶこともなかったのである。

以上の展望のもと、本パネルでは、主として英国、フランス、ドイツ、北欧諸国(主にスウェーデン)におけるスピリチュアルケアの展開に注目し、これを糸口として、ホスピスケア発祥の地である欧州におけるホスピス・緩和ケアの動向を浮かび上がらせ、宗教と

のかかわりに光を投げかけていく。

4名の発表者のうち竹之内裕文は、まずEAPC(European Association of Palliative Care)の調査研究等に基づき、ホスピス・緩和ケアに関する欧州の最新動向を紹介する。そのうえで欧州(ドイツを含む)の研究者たちとの対話を踏まえて、スピリチュアルケアの興隆を読み解く糸口を試論的に提起する。諸岡了介は、英国を中心とした英語圏において近年見られる「ホスピスケアの世俗化」言説を主題として、一方ではこうした言説が生み出される社会的・宗教的背景を、他方ではこうした言説が向けられているホスピス・緩和ケア自体の動向に光を投げかける。伊達聖伸は、ライシテの国フランスにおいて「スピリチュアル」という言葉がどのような位置を占めているのかを分析し、それがホスピス・緩和ケアと宗教とのかかわりにどのような影響を与えているのかを考察する。坂井さゆりは、スピリチュアルケアの実践に照準を合わせつつ、英国やスウェーデンにおけるホスピス・緩和ケアの現状と課題を、日本のそれとの対比において分析する。そのうえで看護学という立脚点から、ホスピス・緩和ケアが孕む宗教的・宗教学的な課題について問題提起する。

坂井の発表は、先行する三者の発表に対するケアの立場からの応答という性格を併せ持つため、本パネルにはコメントを加えず、4名の研究発表後、ただちにフロアとの討議に移る。欧州諸国におけるスピリチュアルケアの動向という具体的な糸口から、「ホスピス・緩和ケアと宗教」という壮大なテーマに迫る本パネルは、活発かつ創造的な議論を喚起すると期待される。

宗教多元時代における宗教間教育の実践とその課題

代表者： 那須 英勝

宗教間教育とは何か—その必要性と課題— 小原 克博 (同志社大)

宗教間教育の可能性を考える—単位互換科目の現場から— 安永 祖堂 (花園大)

宗教間教育の実践とその評価—海外の事例との比較を通じて— 那須 英勝 (龍大)

コメンテータ： 井上 順孝 (國學院大)

司会： 那須 英勝 (龍大)

2005年に設立された「京都・宗教系大学院連合」(Kyoto Graduate Union of Religious Studies 略称 K-GURS)は、宗教の多元化が進行する中で、京都を中心とした宗教系大学の大学院(大谷大学、高野山大学、種智院大学、同志社大学、花園大学、佛教大学、龍谷大学の7つの大学院および大学が加盟校として参加し、2014年度からは、新たに皇學館大学大学院が加盟)が、それぞれの宗教や宗派の特色を生かした教育プログラムを展開し、次世代の宗教研究者、宗教指導者、宗教に関するプロフェッショナルとなる人材育成を行い、研究上の相互交流を図ることを目的としている。中でも、宗教間教育(interfaith education)の実践は、K-GURSの設立の目的の一つとして掲げられ、すでに各加盟校においてさまざまな取り組みがなされている。本パネルでは「宗教多元時代」をキーワードとして、K-GURSにおける宗教間教育の具体的な取り組みの事例をもとに、学術的、実践的な立場の両面から、その意義と課題、そして将来の展望について検討する。

1. 小原克博: 宗教間教育とは何か—その必要性と課題—

K-GURSは、大学院教育を共通基盤としながら、異なる宗派(特に仏教内における)や異なる宗教(日本宗教および一神教)の間の対話や交流を推進することを目的として設立された。同じ京都(関西)の地でありながら、これまでK-GURS加盟各校は十分な教育・研究上の関係を持ち得なかったが、国内的にも国際的にも宗教の多元化が進行する中で、宗教間対話をより具体的な形で展開すべきであるとの認識が、K-GURS設立の背景にあったと言える。宗教をめぐる国内外の事情やK-GURSの実践事例(単位互換制度、チェーンレクチャー、大学院生発表会等)をとりあげながら、宗教間対話の今日的課題と、宗教間教育が、それにどのように寄与するのかについて論じる。

2. 安永祖堂: 宗教間教育の可能性を考える—単位互換科目の現場から—

「自らが帰属する宗教的伝統だけでなく、他の宗派や宗教についても認識を深めることのできる教育プログラムが必要」というK-GURS設立の精神に則り、加盟大学院間に於いて「単位互換制度」が実施されている。本発表ではその具体例を提示してみたい。一つは、他力浄土門と自力聖道門にあって超越者の介在のあり方を大学院生が議論した事例であり、もう一つは、キリスト教修道制と禅院という異なった宗教共同体にあって構成員の求心力を那邊に措定するかが問われた討論である。これらをK-GURSの教育及び研究の将来的発展を模索する議論の素材として提案し、諸賢のご教示を仰ぎたい。

3. 那須英勝: 宗教間教育の実践とその評価—海外の事例との比較を通じて—

グローバルなレベルで宗教多元化が進む現代社会において、宗教間対話の必要性への認識が高まりつつある中で、宗教間対話の基盤としての宗教間教育の実践について様々な取り組みがなされている。しかし、宗教間教育の実践の現場においては、その評価の方法等も含めて、まだまだ発展途上の段階にあるのが現状であるといえよう。本発表では、K-GURSにおける宗教間教育の取り組みを、海外での宗教間教育の事例等とも比較しながら、大学院レベルで提供されるべき宗教間教育の実践とその評価のあり方について検討してみたい。

被災地における心霊体験とその意味について

代表者： 相澤 出

質問紙調査からうかがわれる被災地支援と宗教者の現況 相澤 出 (爽秋会岡部医院研究所)

宗教者による心のケアと心霊現象—聴き取り調査から— 高橋 原 (東北大)

被災地における霊的体験と継続する絆—身内の霊と未知の霊— 堀江 宗正 (東大)

祟る？それとも護る？—カウンセリングにおける霊出現の意味— 大村 哲夫 (東北大)

コメンテータ： 谷山 洋三 (東北大)

司会： 高橋 原 (東北大)

多くの死者を出した東日本大震災の被災地において、「幽霊を見た」「幽霊に取り憑かれた」といったいわゆる「心霊現象」がしばしば報告されていることはよく知られている。虚実入り交じったそのような体験談は、大量の死者を出した被災地に特有の不安を反映したものであると考えられるとともに、身近な人との死別による悲嘆反応のひとつであるとも考えられる。一方、震災以来、被災地では仏教僧侶を中心とする宗教者による慰霊行事が継続的に行われており、彼らによる傾聴活動とともに、被災者の心のケアという点で有意義なものとして評価されてきている。しかし、「心霊現象」にまつわる個別の依頼に対して宗教者がどのように対応しているのか、その実情は知られていない。

このような状況を踏まえて、本パネルでは、東北地方の民俗的宗教文化という文脈のもとで、心霊現象の体験を語る人々への対応の仕方という観点から、被災者支援に関わるさまざまな専門職とは異なる宗教者独自の役割を明らかにするとともに、人々がそのような体験談を語ることの意味を考察するものである。

本パネルのベースとなっているのは、科研「東北被災地域における心霊体験の語りと宗教者による対応に関する宗教学的研究」(挑戦的萌芽研究、研究代表者：高橋原)による宮城県内の宗教者を対象とした調査である。2013年度に宗教者を対象とした質問紙調査を終え、現在インタビュー調査を継続中である。この調査では、「心霊現象」を体験した人々が実際に存在し、その体験について一定数の宗教者が相談に乗っていることが示されてきている。そして、個々の宗教者による心霊現象への対応の仕方や霊魂観には宗教宗派ごとの相違や特色があるとともに、地域に存在する「拝み屋さん」などの民間宗教者の活動との相互作用によって影響されている部分があることもわかってきた。以上を踏まえて、個々の発表者の発表内容は次のようなものとなる。

相澤出は、上記質問紙調査の結果の概要を報告するとともに、いわゆる心霊現象に対する宗教者の対応の

仕方や霊魂観の宗派別の傾向、相談される体験談の種類等を、宗教者による被災地支援活動という観点から分析し、考察する。

高橋原は、聴き取り調査をもとに、宗教者がそれぞれの所属する宗教宗派の教義や霊魂観を持ちながら、地域の民俗的宗教文化の中に生きる人々を相手として、具体的にどのように「心霊現象」に対応しているのかを報告する。また、その際にとりわけいわゆる民間宗教者の実践と仏教僧侶や神職の関係のあり方に注目する。

堀江宗正は上記調査の中で得られた霊的体験の語りの内容に注目し、身内の霊に出会うという体験と、見知らぬ人の霊に出会うという体験ではその性質が異なるという見通しのもと、亡くなった人々との間に「こころの絆」を感じ続けていることが霊との出会いという体験にどのように影響を与えているのかを考察する。

大村哲夫は、被災地で臨床心理士として活動する中で心霊現象がカウンセリングの相談内容として現れたケースを取り上げ、心理専門職としての対応と宗教者による対応の違いを分析し、宗教者が心のケアにおいて果たすことのできる独自の貢献があり得るとしたらそれはどのようなものなのかを考察する。

以上を受けて、コメンテータの谷山洋三は、被災者等の心のケアに従事する宗教者の教育プログラムを実施している経験を踏まえて、心霊体験は死別による悲嘆反応のひとつとしてとらえることが可能であり、宗教者によるグリーフケアがとりわけ有効な領域であるという観点から、コメントを述べる。

宗教学誕生期の再検討—ミュラーからデュルケームまで—

代表者： 江川 純一

ミュラー宗教論の再検討—原初的「名づけ」とその凋落を巡って— 久保田 浩 (立教大)
タイラー『原始文化』におけるビリーフ／プラクティス問題 堀 雅彦 (北星学園大)
アンドルー・ラングの宗教論 江川 純一 (東大)
デュルケーム『宗教生活の基本形態』における「信念」と「実践」 山崎 亮 (島根大)
コメンテータ： 松村 一男 (和光大)
司会： 江川 純一 (東大)

昨年、『宗教学名著選』（国書刊行会、全六巻）の刊行が開始された（マックス・ミュラー『比較宗教学の誕生』、タイラー『原始文化』全二巻、ペッタッツォーニ『神の全知』、ハイラー『祈り』、エリアーデ『アルカイック宗教論集』）。また本年、デュルケーム『宗教生活の基本形態』（ちくま学芸文庫、全二冊）の新訳が刊行される。

宗教学の古典的名著の再評価が進行しつつあるという状況を踏まえ、本パネルでは19世紀後半から20世紀初頭にかけての所謂「宗教学誕生期」における宗教理論の再検討を行う。

今回取り上げるのは、宗教の発生について独自の理論を提出している、フリードリヒ・マックス・ミュラー（1823-1900）、エドワード・バーネット・タイラー（1832-1917）、アンドルー・ラング（1844-1912）、エミール・デュルケーム（1858-1917）の四人である。まず、彼らが先行研究をどのように批判・継承したかを踏まえつつ、それぞれの神話論と儀礼論を抽出し、両者の相関という観点から彼らの宗教理論を再考する。念頭にある問いは、彼らは「宗教」という語彙でなにを指し示したのか、そしてそこから漏れてしまったものはなにかである。その上で、神話論・儀礼論の変遷について（ミュラーの『比較神話学』からデュルケームの『宗教生活の基本形態』まで56年ある）、宗教を信念（ビリーフ）と実践（プラクティス）のセットとして捉える宗教観が共有されていたのかについて原典に基づき考察したい。

本パネルは先に挙げた古典的著作の新訳に携わっている研究者によって構成されている。

まず、久保田が「比較宗教学の祖」フリードリヒ・マックス・ミュラーの「宗教学」の構想をその学問史的・宗教史的な文脈において検討する。その際、ビュルヌフやポップ等によって先鞭がつけられた「比較文献学」・「比較言語学」的な知見がミュラーによって「比較神話学」・「比較宗教学」的な言説へと変容していった点に着目し、神話言説が言語の病的形態であると喝

破したミュラーにおける言語論と宗教論との連関について改めて問い直す。

次に、堀がイギリスの人類学者エドワード・バーネット・タイラーの『原始文化』におけるビリーフとプラクティスの用法に注目し、両概念が彼の言う文化の一領域としての宗教の規定にどのように関わっているかを検討する。同書の鍵をなすアニミズムを、タイラーは原始的な哲学と見なすとともに、諸々のプラクティスとの結びつきにおいて宗教の起源とも見なしている。このような彼の宗教観を支える諸前提とその問題点についても論じる。

続いて、江川がスコットランドの文筆家・民俗＝民族学者であるアンドルー・ラングの著作を取り上げ、彼がマックス・ミュラーの太陽神話論、タイラーのアニミズム、フレイザーの呪術理論をどのように批判したのか、その宗教理解はいかなるものだったかについて報告する。先行研究を批判しただけで新しい理論を提出していないとされるラングだが、はたして本当にそうだろうか。複数の著作を繋ぐ糸を見つけることで、心靈学への傾倒をも包括したラング宗教論を明らかにする。

最後に、山崎がエミール・デュルケームの宗教社会学の名著『宗教生活の基本形態』を取り上げる。周知のように本書においては、宗教起源説としてのアニミズムとナチュリズムが徹底的に批判され、マックス・ミュラー、タイラー、ラングがいずれもその俎上に載せられている。彼らの宗教論に対する批判を俯瞰することを通じて、また『宗教生活』以前の著作も参照しながら、デュルケーム自身による「信念」と「実践」との二分法の含意を検討する。

四人の発表を受け、松村が神話学・宗教学の学問史という観点からコメントを行ない、フロアも交え時間の許す限り討論する。

内村鑑三における「二元論」問題再考—矛盾と並存をめぐる—

代表者： 岩野 祐介

土肥昭夫『内村鑑三』における二元論的分析パラダイムの再検討 渡部 和隆 (京大)

内村鑑三の聖書解釈における総合性と多層性の問題 岩野 祐介 (関西学院大)

‘Japan’ と ‘Jesus’ の緊張—キリスト教ナショナリズムと内村鑑三— 赤江 達也 (高雄第一科技大)

内村における二つの価値基準—humanity と divinity をめぐって— 柴田真希都 (日本学術振興会)

コメンテータ： 芦名 定道 (京大)

司会： 岩野 祐介 (関西学院大)

明治～昭和初期の日本を代表するキリスト教指導者内村鑑三は、数多くの著作を残しているが、そこで表現されたキリスト教思想は非常に幅広く、多面的であり、ある文章における主張とまた別の文章における主張とを比較したときに、矛盾しているように見えることもある。たとえば、ある文章では日本のキリスト者ということ強く打ち出してナショナリズム的な主張をしながら、別の文章ではキリスト教の普遍性を力説しているのである。

他にも、赦しと裁き、Jesus と Japan など、一般的には二者択一的であるとみなされることの両方を、内村は追求している。果たして、内村の思想は矛盾しているのか。あるいは、読者に合わせて態度を使い分けているのであろうか。それとも、どちらかが本音であり、もう一方は自らを偽ったものなのであろうか。

土肥昭夫は、内村に「二元論的思考方法」を見出し、「彼はこの立場に立ったがゆえに峻烈きわまる抵抗と拒絶の態度をもって歴史の動向に対して挑戦していった」一方で、内村が二元論的な立場にとどまる限り、「歴史を生き、歴史の中にあるキリスト者の日本を含めて世界に対する正しい対決の方法や責任ある行動は信仰的にも思想的にも不可能であると言えないだろうか」と批判している。(土肥『内村鑑三』日本基督教団出版局、275-6頁)

土肥は、内村のような人間の次元と神の次元とを区別する二元論的なあり方が、結果として日本キリスト教を国策に取り込まれる方向へと導いた、と考えているように思われる。しかし、内村の二元論的思考法から、土肥が「歴史の動向への挑戦」と評した姿勢が導かれていることも確かであろう。そこで本パネルでは、内村の二元論的思考を積極的に捉え直し、社会に対して無関心・無責任になるのでも、取り込まれ利用されてしまうのでもなく、社会と並走し続ける強靱な思想をそこから導き出す可能性をさぐってみたい。

具体的な、各パネラーの報告の概要は以下の通りである。

渡部の報告では、内村の思惟を二元論的だと結論付ける土肥の分析の枠組み自体を検討する。内村は確かに二元論的な思惟を展開するが、その分析にはもっと適切な枠組みが存在するのではないか。本発表では内村の観点から土肥の分析の内村解釈としての適切さを検証する。具体的には、内村の聖書解釈に関する土肥の分析を逆に分析することによって、土肥の分析の枠組みでは取りこぼされている観点の存在を明らかにする。

岩野の報告では、内村が聖書における多層性をいかにとらえているか、という問題を内村の聖書解釈テキストに即して分析する。聖書はそれ自体、一つの書物でありながら、多層的・多声的要素をもつものである。内村による聖書読解を通して、総合的・統合的であることに対しての内村の見解を確認すると同時に、「神のこと」を「人が記した」書、という聖書自体の二重性についての内村の理解を明らかにすることを試みる。

赤江の報告では、明治から昭和初期における「キリスト教ナショナリズム」と呼びうるような思想的潮流のなかで、内村がもっていた一般性と特異性を明らかにする。内村がナショナリストであることは広く知られている。その一方で、戦後思想史では、不敬事件や非戦論ゆえにそのナショナリズム批判が重視されてきた。本報告では、「二つの J」「日本的キリスト教」といった標語を手がかりに内村のキリスト教ナショナリズムを検討する。

柴田の報告では、内村が世俗の事柄に関わるさいに発揮された彼の価値基準を、彼の言動に即して検討する。内村は一般に聖書福音主義の明治・大正期における代表的実践者とみなされうるが、一方で、近代欧米に確立した普遍的諸価値（自由・独立・個人性・民主など）の世俗社会における普及・定着にも熱心であった。本発表ではこうした内村の二方向に展開する言動を導いた、彼の基本的な思惟構造を仮説的に明らかにしようと試みる。

真理・政治・普遍性—ポスト世俗化時代における神学の真理性—

代表者： 佐藤 啓介

分離・区別・一致—キリスト教哲学論争にみる真理の諸相— 佐藤 啓介 (南山大)

マルティン・ハイデッガーにおける／を巡る哲学と神学の関係性 上原 潔 (京大)

チャールズ・テイラーの政治哲学における超越性とは何か 鬼頭 葉子 (聖学院大)

神学者ジョン・ミルバンクによる普遍的真理への挑戦 加藤 喜之 (東京基督教大)

コメンテータ： 深井 智朗 (金城学院大)

司会： 佐藤 啓介 (南山大)

「ポスト世俗化時代」(ハーバーマス、テイラー)といわれる現代において、キリスト教神学は「公共宗教」(カサノヴァ)や政治神学を通して、その公共性が再評価されるようになった。しかし政治のなかでの有用性で神学が召喚される一方、その「真理性」はますます語りにくくなっている。神学は、共同体内部の公共善を構築していくためにのみ存在しているのだろうか。また、ラディカルな思想家(パディウ、ジジェク、アガンベン)たちは、リベラル・デモクラシーを超越する普遍性のモデルを、パウロやキリスト教神学から読み取る。しかしここでも神学は、真理性ではなく、その表象が生み出す普遍性のモデルを供給することに留まっている。現代における神学の世界を見回しても、宗教的な言語ゲーム(イエール学派)や伝統的な信仰共同体のなかで自己完結する神学が少なくない。

このような状況にあって、神学の真理性を問うということは、いったい何を意味するのだろうか。政治によって与えられた所与の条件を超えていく可能性を、神学は提示することができるのだろうか。あるいは、そうした普遍性を自ら解体し、固有の条件下においてのみ成立する真理を目指す点にこそ、現代の神学の意義があるのだろうか。近現代の神学史を紐解いてみると、幾度となく神学は、真理性を構築した哲学と対峙することで自己の真理性を打ち立ててきた。神学は、時に哲学と同じ真理を語っていると主張し、また時に哲学とは異なる真理を独自の仕方語っていると主張し、自らの真理の普遍性あるいは独自性を構築してきたのである。

それゆえ本パネルでは、4名の発表を通して、20世紀以降における哲学と神学の相克を鑑み、また神学の政治性を射程に入れながら、神学の真理性への志向を再考していきたい。

佐藤は、20世紀前半のフランスにおいて起こった「キリスト教哲学論争」を取り上げ、キリスト教哲学が語る真理がどのように捉えられていたのかを、ジルソンやマリタンらの主張を通して明らかにする。また、

特にマリタンの主張に着目し、キリスト教哲学と神学の関係、およびそこから派生する社会的意義を考察し、20世紀フランス思想史にこの論争が残した影響を掘り起こすことを目指す。

上原は、M・ハイデッガーの思索における哲学と神学の関係性をめぐる問題を概観し、そのうえで、神学側からのハイデッガーの思索に対する応答を瞥見する。初期のハイデッガーの思索はキリスト教から多大な影響を受けながら構築されたと言えるが、次第に哲学と神学とを峻別する方向へと向かってゆく。それにもかかわらず、彼の思索は神学に大きな刺激を与え、様々な着想を生み出す源泉のひとつになったことが描き出される。

鬼頭は、カナダの政治哲学者チャールズ・テイラーの思想において、生の多様性を担保すると位置づけられるカトリシズムの超越性について、その特性を論じる。多様な「社会的想像」が交錯するポスト世俗化時代において、テイラーは「宗教のための新たな場所」を公共領域において見出そうと試みる。彼の言う「超越性」概念はその公共領域で、いかなる意味で「超越」たりえるのかを考究していく。

加藤は、冷戦後の世界において起こったポスト・モダン神学の潮流のひとつであるラディカル・オーソドクシー運動、特にその主導者であるジョン・ミルバンクの思想に注目する。ミルバンクは現代哲学との相克のなかで、キリスト教における新プラトン主義の伝統のもつ政治神学的な普遍性を打ち出そうと試みる。このミルバンクの試みを批判的に検討することによって、普遍的な真理を提唱する神学の問題を明らかにしていく。

以上の発表に対し、深井が、政治神学ならびに神学の文化史・社会史・思想史の視点からコメントをおこなうことで、パネル全体として、哲学・政治双方からみた近現代キリスト教神学の真理性をめぐる諸問題の所在を示したい。

新たなキリシタン史構築を目指して—通史的視座からの試み—

代表者： 狭間 芳樹

長崎における「聖なる空間」の変遷—キリシタン時代を中心に— トロス・カルラ (天理大)

イエズス会士の仏教語理解ときりしたん民衆の宗教観 狭間 芳樹 (京大)

信教の自由とキリシタンの信仰 内藤 幹生 (千葉県文書館)

キリシタン神学の可能性—『天地始之事』を巡って— 長谷川(間瀬)恵美 (桜美林大)

コメンテータ： 日沖 直子 (南山宗教文化研究所)

司会： 狭間 芳樹 (京大)

日本キリシタン史の研究は、これまで第一期「キリシタン」(16~17世紀)、第二期「潜伏キリシタン」(17~19世紀)、第三期「かくれキリシタン」(19世紀~)という三つの時代区分のもとでなされ、多くの成果が積み重ねられてきた。しかし、それらはそれぞれに異なる歴史観や研究方法に依拠していたことから、各々の研究成果が必ずしも互いに有機的に関連してはいない。さらにいえば、そうした時代区分は、ともすればキリシタン史を分断してしまうことにもなる。たとえば、第一期のキリシタンが西洋のキリスト教に倣った「純粋」な信仰であるものの、第二期以降になると変容が生じる、といった議論はこうした時代区分にもとづくものである。そもそも価値中立的に、あらゆる宗教現象を等価に扱うという宗教学の基本姿勢に則るなら、特定の規範的価値にとらわれることなく、日本人キリシタンの信仰のありようを考察することがキリシタン研究にも求められる。そこで、本パネルにおいてはキリシタンの意味世界を、宣教師が伝えようとした西洋のカトリック信仰としてだけではなく、日本で受容された日本人信仰者の独自の宗教世界としてとらえ、さまざまな信仰表現の意味を時代の枠を超えた通史的な視座から検討することにより、従来のキリシタン研究と日本キリスト教研究に新たな地平を開くことを目指す。

個々の発表内容は以下のとおりである。

発表者1 (トロス)

本発表では、現在の長崎市周辺地域の「聖なる空間」の変遷をカトリック宣教に焦点をあて、通史的に考察する。17世紀初頭に確立されたカトリック教区制度を中心に、「聖なる空間」の設立と役割を検討し、さらに潜伏キリシタン、隠れキリシタン、そしてカトリック教徒それぞれにとっての「聖なる空間」の特徴と役割を比較する。長崎の「聖なる空間」変遷の理解においては、日本キリスト教史に鑑み、また民衆の宗教的共同体の設立と発展における「聖なる空間」の役割につ

いても言及する。

発表者2 (狭間)

イエズス会士ガゴが宣教の際に仏教語を用いることでの弊害を指摘して以来、西洋語の採用が強化されたが、一方で以後に刊行された「きりしたん版」において西洋語から仏教語に再び改められた箇所も散見される。本発表では主に伝道者側のために刊行されたローマ字版(1596年)と受容者(日本人)向けに改訳された国字版(1610年)とがある『コンテムツスムンヂ』の分析を通して、その事情を探るとともにきりしたん時代の民衆が希求した宗教の内実を明らかにしたい。

発表者3 (内藤)

「潜伏キリシタン」が禁教高札撤去後にカトリックに入信した「復活キリシタン」と、潜伏時代のままの信仰形態を保持した「かくれキリシタン」とに分派した時代的な意味を明らかにする。禁教高札撤去により、キリシタンは国家規制からは解放されたが、キリシタンが生活する集落内部では信仰をめぐる問題が発生し、それはキリシタン自身の信仰の問題ともなった。本発表では、禁教高札撤去前後におけるキリシタンの信仰をめぐる動向を記録史料から検討し、キリシタンに対しての信教の自由の意味について考える。

発表者4 (長谷川 [間瀬])

長谷川(間瀬)は、異文化におけるキリスト教の実生化(みしょうか・インカルチュレーション)を研究テーマとしている。本発表では長崎の潜伏キリシタンによって口伝された聖書物語、『天地始之事』を取り上げる。民衆の間に根付いた、この表象的テキストにおいて、彼らが西洋キリスト教をどのようにとらえ、関係づけ、意味づけて、彼らの神学を構築したかを考察する。

宗教における「自由」「平等」—宗教の学際的研究に向けて—

代表者： 勝又 悦子

理想のリーダー像にみるユダヤ教の「自由」「平等」	勝又 悦子	(同志社大)
マイモニデスの「自由」「平等」観	神田 愛子	(同志社大)
中世ユダヤ思想における「民主主義」—アバルヴァネルを中心に—	平岡光太郎	(大阪商業大)
ウンマの統治と「自由」「平等」—奴隷エリートと権威主義体制—	森山 央朗	(同志社大)
司会：	勝又 悦子	(同志社大)

発足から10年が経過したCISMOR(同志社大学一神教学際研究センター)では、三つの一神教—ユダヤ教・キリスト教・イスラームを中心に、活発なシンポジウム、研究会が開催されている。その内容は、現代において宗教が絡む政治、安全保障問題が議論される現代政治部門と、一神教それぞれの基礎研究にあたる基礎部門に大別される。そして、こうした研究会等で、しばしば、最終的に問われるのが、結局、ある概念を、ある用語を、各宗教がいかに定義しているのかというシンプルな問いである。例えば、「アラブの春」が頓挫する過程を目の当たりにする中で、「宗教」と「民主主義」は両立するのかが問われる時、各宗教が想定する「民主主義」に隔たりがあるのではないかという疑問が生じる。ここで、再び定義の問題に立ち戻る。各宗教がある用語や概念をどのように理解しているのかを問うことは地味な作業であるが、他者理解における基本であり、CISMORの上記二つの部門を連結させる営みではないだろうか。

こうした状況を踏まえて、本パネルでは、二つのテーマを扱う。一つは、パネリストの専門であるユダヤ教、イスラームにおける基本「概念」の定義、整理に取り組むことである。現代において切迫した問題が上記のように「宗教」と「民主主義」の両立の可能性であることを考え、本パネルでは、「民主主義」の前提をおそらく構成しているであろう「自由」「平等」概念を扱う。特にイスラーム、ユダヤ教においては主要な要件となる各々の「法」概念との関係の中で、これらの概念がどのように芽生えてきたのか、その経緯、内容について、個々のパネリストが専門とする時代、地域を中心に検証する。無論、パネリストが扱う時代や地域の「自由」「平等」は現代のそれらとは異なる。しかし、ルーツを探ることでこれらの概念の各宗教における前提の違いが明らかにされるのではないか。もう一つのテーマは、宗教の学際研究の在り方についての提言である。概念研究が、単なる語源探索に終わらないための、思想、歴史、政治学他、を総動員した学際的な宗教研究の方向性と可能性を探る。

以下各パネリストの発表概要は以下の通りである。

勝又：CISMORでの研究史を総括し、「自由」「平等」「法」についてのラビ・ユダヤ教、ゲニザ文書をたどる。彼らが理想としていたリーダー像を通して、古代・中世のユダヤ教はどのような体制を求めていたのかを探る。

神田：マイモニデス(Moses Maimonides, 1138-1204)は『ミシュネー・トーラー』第7巻「種子篇」と『迷える者の手引き』第3部39章において、貧者に対する施しとヨベルの年の奴隷解放について論じている。「種子篇」は農事関連法に言及したものだが、実質的には慈善行為を中心としている。本発表では、彼の「自由」「平等」観が何を基盤としたものかにつき考察する。

平岡：紀元70年の離散以来、国土と一体型の統治機構を持たなかったユダヤ人は、統治についての思想をいかに展開したのだろうか。本発表では、イツハク・アバルヴァネル(Isaac Abarbanel, 1437-1508)の聖書注解に見られる、「民主主義」の理解を明らかにする。

森山：ウンマ(信徒共同体)の統治は、イスラームの中核的課題の一つである。19世紀までの歴史の中で、カリフをウンマ全体の最高指導者とする理念がウラマーによって議論される一方で、実際の統治は、奴隷出身者が多くを占める軍人エリートが行ってきた。この理念と実態の乖離は、どのように整合されたのであろうか。そして、「近代化」の中でどのように変容し、現代の権威主義的体制に帰着したのであろうか。本報告では、こうした問題を、自由身分のムスリムと平等とは見なされない奴隷に関するイスラーム法上の概念規定と、奴隷出身軍人エリートの歴史の実態から考察する。

人口減少社会における寺院仏教の役割—浄土真宗寺院を事例に—

代表者： 櫻井 義秀

北海道の過疎地域における真宗大谷派寺院	櫻井 義秀 (北大)
複数寺院がかかわる講組織の現況—七里講を事例に—	川又 俊則 (鈴鹿短大)
真宗高田派住職の兼業—寺院の維持と移行期の問題—	藤喜 一樹 (愛知大)
寺院がつくる地域—仏教婦人会の活動を中心に—	猪瀬 優理 (龍大)
滋賀の本願寺派寺院と地域社会—「信頼」はいかに醸成されるか—	那須 公昭 (浄土真宗本願寺派総合研究所)
司会： 櫻井 義秀 (北大)	

本パネルでは、仏教寺院が地域社会形成に果たす役割を過疎地域(限界集落)/中間地域(地方都市)において明らかにし、宗教施設が今後の日本社会におけるソーシャル・キャピタル形成に果たす潜在的可能性を議論するための基礎的な資料提供を目的とする。

本研究は、2012年から14年まで継続された科学研究費基盤研究(C)「寺院仏教とソーシャル・キャピタル—過疎・中間・過密地域の比較」の研究成果発表である。研究代表者は櫻井義秀、分担研究者は川又俊則、大谷栄一、猪瀬優理である。浄土真宗寺院を対象に選ぶ理由は、研究代表者の櫻井が北海道における大谷派の過疎地域対応を調査したことから、寺檀関係が強い(20~30軒でも一寺院が維持される強み)北陸・関西・中国地方の同教団寺院と比較対照しながら、過疎地域・中間地域における仏教寺院の過疎化対応や社会的機能を調査できると考えたからである。

具体的には、各地域における寺院の過疎化や高齢化への対応に加えて、檀徒・信徒(門徒)のメンバーシップと行事参加(信仰の深まり)が、寺檀関係や門徒同士の同朋意識を強化するだけではなく、地域社会への参加、他者への信頼、社会倫理の獲得に結びついていくというソーシャル・キャピタル論にまでつながるような調査研究の報告としたい。

発表の構成は下記の通りである。

1 櫻井義秀(北海道大学)「北海道の過疎地域における真宗大谷派寺院」

上記の問題の説明および北海道の真宗大谷派寺院の調査から、過疎地域における寺院の社会的機能、都市部寺院の活動などを事例として報告する。

2 川又俊則(鈴鹿短期大学)「複数寺院がかかわる講組織の現況—七里講を事例に—」

鈴鹿市には「七里講」という組織がある。真宗高田派12カ寺(七里)の門徒たちによるもので、200年以

上も毎月の行事を続け、本山参詣も行ってきた。現在も、毎月四日に講が輪番で行われている。その寺院の住職および門徒たちの語り、七里講の観察などから、地方都市における寺院とコミュニティの歴史的関係および現況について考察する。

3 藤喜一樹(愛知大学総合郷土研究所研究員、真宗高田派寺善性寺副住職)「真宗高田派住職の兼業—寺院の維持と移行期の問題—」

真宗高田派寺院では、住職が兼業から専任に至るケースが圧倒的に多い。兼業しながらの寺院運営は、ソーシャル・キャピタルの貴重な資源たる檀信徒とのかかわりで障害が生まれることもある。それぞれの兼業寺院がこのような檀信徒との障害をどのように克服してきたのか。成功している事例を中心に、今後予想される問題点について論ずる。

4 猪瀬優理(龍谷大学講師)「寺院がつくる地域—仏教婦人会の活動を中心に—」

広島県三次市では、複数寺院で連携して病院法話活動(僧侶)や病院ボランティア活動(仏教婦人会)が実施されている。滋賀県における寺院調査においても、寺院活動が地域住民の交流の場となっている事例を見出すことができた。仏教婦人会の活動の紹介を中心として、寺院を軸とした活動が地域形成に対して持つ可能性について検討する。

5 那須公昭(浄土真宗本願寺派 総合研究所研究員)「滋賀の本願寺派寺院と地域社会—「信頼」はいかに醸成されるか—」

お寺の「信頼」はいかに醸成されるのか。本発表では、少数門徒で兼業率が高いという特徴を持つ滋賀県の本派寺院の事例を元に検証する。特に、寺院運営と兼業の実態に焦点を絞り、寺院と地域の信頼関係を明らかにする。

仏教から見た宗教間対話の可能性

代表者： 藤 能成

仏教チャプレンと牧師との連携—病院臨床の現場での一事例— 打本 未来 (龍大)

宗教間の対話—韓国での取り組み事例を通して— 藤 能成 (龍大)

野々村直太郎の浄土教批判の本質について 原田 哲了

日本仏教をキリスト教徒にどう教えるか 寺本 知正 (NCC宗教研究所)

コメンテータ： 高田 信良 (龍大)

司会： 藤 能成 (龍大)

パネル「仏教から見た宗教間対話の可能性」 代表：
藤 能成

今日、私達が暮らす社会には様々な宗教があり、それぞれに異なる価値観、人間観、世界観、歴史観等を有している。そのために、異なる宗教を信じる人々の間では、葛藤や不信、また対立が生じることを避けられない。異なる宗教・信仰を持つ人々が、相互に相手の立場や信仰を認め共存していくことは、安全で平和な社会を実現する上で非常に重要な要素である。本パネルでは、仏教の立場に立って、特にキリスト教とどのように理解し合い、共存していくことができるのか、幾つかの対話の事例を通して、宗教間対話の可能性について考察する。さらに仏教の立場から、どのようにすればキリスト教徒との対話や相互理解を進めることができるのかを検討する。

1、打本 未来：「仏教チャプレンと牧師との連携—病院臨床の現場での一事例—」

本発表では、病院チャプレンと牧師が連携し、終末期がん患者とその家族をサポートした事例を提示する。患者は、20代後半の男性であり、初診時に多数の臓器に転移のみられる終末期の状態であった。家族は、病院に通うことのできない遠方に暮らしていたため、教会が運営している宿泊施設を利用していった。そのために、家族にはその教会の牧師夫妻の支援があった。本人への病名告知、予後の告知など、家族の意見が割れることもあったが、重要な局面で仏教チャプレンと牧師が協力し、最期まで患者と家族の希望をささえることができた事例を紹介する。さらに、この事例を通して宗教間対話の意義について考察する。

2、藤 能成：「宗教間の対話—韓国での取り組み事例を通して—」

韓国は多宗教社会である。2005年現在、各宗教の信徒数比率は、対全人口比で仏教23%、プロテスタント18%、カトリック11%であり、宗教間の対話と相互理

解が切実に求められる状況にある。発表者が7年間の韓国滞在中、研究員として在籍した現代宗教文化研究所では、1976年より毎年、異なるテーマを設定し、儒教、仏教、プロテスタント、カトリックのそれぞれの立場からの見解を発表し、対話を進めるセミナーを開催してきた。本発表ではその活動を紹介すると共に、発表者自身が仏教徒の立場に立って行った、プロテスタントおよびカトリックの聖職者らと対話の事例を報告すると共に、親鸞とパウロの思想的共通性を基盤とした宗教間対話の可能性と意義について考察する。

3、原田 哲了：「野々村直太郎の浄土教批判の本質について」

野々村直太郎(1871~1946)は、いわゆる大正デモクラシー期において仏教における浄土教批判を行った。ここには、当時の大学の学問的独立性と教団の関係、そして巻き起こる教学論争など様々な問題が含まれている。しかし今回はこのような側面ではなく、野々村の批判の根底にある、宗教学としての視点、あるいはヒューマニズムの問題等を取り上げ、近代合理主義、プロテスタンティズムに立脚しようとする彼の姿勢が、宗教の本質を問い直し、宗派等を超える宗教間対話に示唆する要素を考察する。

4、寺本 知正：「日本仏教をキリスト教徒にどう教えるか」

ヨーロッパで仏教がポスト・キリスト教宗教の選択肢の一つとして語られるようになって久しい。また、日本の多宗教環境が多元主義時代の一つの先駆として見られることも稀ではない。確かに仏教が理念レベルで語られるとき、それは魅力的に見えるだろう。しかし歴史的経験レベルではどうか。近代以来プロテスタント中心の宗教理解枠の中で自己同定してきた仏教をヨーロッパの神学生・聖職者に教えるときに立ち現れる問題について論じる。

日本のカトリック教会の在日外国人支援にみる「多文化共生」

代表者： 高橋 典史

カトリックによる在日外国人支援活動の歴史と現状	白波瀬達也	(関西学院大)
日本におけるインドシナ難民の受入・定住化とカトリック教会	高橋 典史	(東洋大)
カトリックを基盤とするフィリピン人コミュニティの関係拡大	永田 貴聖	(立命館大)
カトリック教会とデカセギたち—「共振」の諸相—	星野 壮	(大正大)
コメンテータ：	板井 正斉	(皇學館大)
司会：	高橋 典史	(東洋大)

いわゆる「ニューカマー」と呼ばれる人びとが日本に到来するようになって久しい。日本社会が徐々に多民族ないし多文化化を進めてきたなかで「多文化共生」というコンセプトが広まり、とくに各地の行政の施策において頻繁に取り上げられるものとなってきたことは周知の通りである。ただし、欧米諸国のような移民国家とは異なり、日本における外国人の受け入れや定住支援における公的なサポートはかなり限定されたものであるため、十分に制度が整えられてきたとはいえない。言語や文化の相違といった問題だけではなく、不安定な雇用・経済状況や法的立場等が原因となって社会的排除にさらされ続けている在日外国人たちの数は決して少なくないにもかかわらず、である。そうした文脈において「多文化共生」という言葉は、いまだ実現されていない未完のスローガンの域を越えていない。

日本においてこのような「多文化共生」の制度的な不備の隙間を埋めてきた有力な民間組織の1つが宗教組織であり、わけてもカトリック教会が他からは群を抜く突出した実績を有している。そうしたカトリック教会による在日外国人支援の展開の要因としては、大きく分けて2つの点を挙げることができる。すなわち、第一にニューカマーたちの到来以前からカリタスジャパンのような国際的な支援活動の蓄積があった点、第二に国内における既存の日本人信者の高齢化や減少の一方で、ニューカマーの到来にともなって一部の地域においては教会に集う外国人信者が急増した点である。とはいえ、全国の教会が一丸となってシステムチックに大規模な在日外国人支援に取り組んできたわけではなく、各地の教会がそれぞれの抱える問題状況に対応するために試行錯誤しつつさまざまな支援を行ってきたというのが実情である。

こうした宗教組織による在日外国人支援に関しては、一般的にはあまり知られていないばかりか、研究の蓄積もごくわずかである。本パネルでは当該の研究領域の開拓のためにも、外国人集住地域のカトリック教会

による在日外国人支援の取り組みに焦点を当てて、各地域においてそれらが果たしてきた役割と課題を明らかにすることを目的とする。それは同時に、「多文化共生」という旗印と諸実践における、宗教組織による活動の有効性と限界を浮かび上がらせることにもつながっていくだろう。

本パネルの具体的な発表内容は次の通りである。第一発表者である白波瀬が、総論として日本のカトリック教会による在日外国人支援に関わる活動の歴史と現状の大きな見取り図を解説する。そのうえで、第二発表者の高橋が、ニューカマーでは初期に来日し始めたベトナム人を中心とするインドシナ難民の受け入れと定住の支援事業について、静岡県等のカトリック教会を事例に検討する。つづく第三発表者の永田は、京都市のフィリピン人コミュニティのネットワークの拡大とカトリック教会との関わりについて論じ、第四発表者の星野が、愛知県での事例を中心に、「デカセギ」の南米系住民への支援の実態について考察する。なお、この発表の構成は、ニューカマーの到来時期の順にもおおそ対応しており、それぞれの時期の各外国人集団においてどのようなことが問題化し、それに対してカトリック教会がいかに対応したのかを可視化させることも意図している。

4人の発表後、板井氏より社会福祉学的な観点も含めて、地域福祉にも関わるカトリック教会による在日外国人支援の意義についてコメントをいただく。その後、議論をフロアに開放し、活発な討議を重ねる予定である。

近代日本の修養・精神療法・新宗教における身体論と国家論

代表者： 吉永 進一

江戸儒学における政治と身体 野村 英登 (二松学舎大)

忠義を行ずる—笈克彦から佐藤通次にみる身体=国家論の系譜— 栗田 英彦

霊術と国家観—三井甲之の手のひら療治— 塚田 穂高 (國學院大)

民衆宗教の政治性とはなにか 永岡 崇 (南山宗教文化研究所)

コメンテータ・司会： 吉永 進一 (舞鶴高専)

戦前、修養法、健康法、精神療法など、既成宗教、新宗教や医療の枠をはずれた地点で、ある種の宗教性を帯びた心身技法の実践が行われたことは、すでに2013年度学術大会におけるパネル「近現代日本の民間精神療法の展開」にて報告したとおりである。仏教における「信」が近代に入って脱文脈化され、個人的経験を重視する近代的信仰へと変容していく過程と並行して、近世における「行」的なものは「宗教」から切り離され、催眠術によって心理学化された後、明治30年代以降、あらためて新たな精神的意味や次元を獲得していく。その際に、「行」に社会的な意味づけがなされる場合が往々にしてあり、そのなかで国家主義的傾向を帯びる傾向が見られた。調精術を行った歌人の森田義郎、強健術の肥田(川合)春充、そして代表的な精神療法団体である太霊道がそうである。しかし、国家論と心身技法が親和的であったとして、それは一部の事例の偶発的な事件にすぎないのか、あるいは意味ある内在的関係が存在するのだろうか。

もっとも重要な事例として、近年研究が進んでいる三井甲之があげられる。超国家主義者とと言われる三井が、熱心な親鸞信奉者であったと同時に江口俊博の手のひら療治(臼井式霊気療法)を実践し、それはまた彼の国家論につながっていたことが、片山杜秀らの研究で知られつつある。同様の事例でありながら、いまだほとんど研究がなされていないのは、ドイツ語学者で皇道哲学者であった佐藤通次における岡田式静坐法と政治思想の関係である。本パネルでは、彼らの思想がどのような系譜の上に誕生したのか、その連続性・断絶性を視野に入れつつ、身体技法と政治思想の関係を探ることにより、脱文脈化された行が、どのように個と全体をつないでいたのかを検証する。

野村の発表「江戸儒学における政治と身体」では、明治大正期の近世健康法リバイバルと、儒学の近代化としての中国哲学の構築を対比しつつ、双方で注目されていた中江藤樹、熊沢蕃山、佐藤一齋などの思想から、身体と政治の関係がいかに近世までの儒学から逸脱していったか、またそれがその後の修養と政治の関係のバックグラウンドになっていたかを明らかにする。

栗田の「忠義を行ずる—笈克彦から佐藤通次にみる身体=国家論の系譜—」では、笈や佐藤のような国家主義思想家がどのようにして健康法・心身鍛錬法に向かったのか、について「信」と「行」を対比させながら論じる。また、神道系の行(笈)と坐禅系(佐藤)の比較も行う。塚田の「霊術と国家観—三井甲之の手のひら療治—」では、技法の源流となった臼井甕男の霊気療法から論じて、それがどのように三井における国民宗教礼拝儀式としての「手のひら療治」、すなわち「シキシマノミチのタナスエノミチ」という意味を帯びたのかという変容過程を論じていく。

他方、教団組織を形成して活動した新宗教に目を転じると、大本や天理研究会をはじめ、大正期以降「政治化」を深めていったものも少なくない。これらの動きは、三井や佐藤らの国家論との間にどのような差異や共通性がみられるのだろうか。永岡の「民衆宗教の政治性とはなにか」では、病気治しを核として発展した戦前期の新宗教の思想や実践、そしてその綻びを歴史資料から読み解くことを通じて、民衆の欲望という観点から身体と政治の関係性を再考する。新宗教の国家論と対比させることによって、それぞれの性格のちがいを明らかにし、宗教と政治の関係に関する新たな視野を開くことができよう。

宗教研究として「身心変容技法」研究が問いかけるもの

身心変容技法研究が問いかけるもの	代表者： 鎌田 東二
身心変容技法としての祈り	鎌田 東二 (京大)
身心変容技法を心霊研究圏内から考える	棚次 正和 (京都府立医科大)
身心変容技法とキリスト教神秘主義	津城 寛文 (筑波大)
身心変容技法とマインドフルネス	鶴岡 賀雄 (東大)
	井上ウィマラ (高野山大)
	司会： 鎌田 東二 (京大)

1. 企画の意義

「身心変容技法」とは、身体と心の状態を変容・転換させる諸技法である。古来、宗教・芸術・芸能・武道・スポーツ・教育などの諸領域においてさまざまな「技法」が編み出され、伝承され、実践されてきた。それをわたしたちは、科研「身心変容技法の比較宗教学—心と体とモノをつなぐワザの総合的研究」として2011年度から3年余の研究活動を継続し、その成果を科研報告書『身心変容技法研究』(通算3号、2012年、13年、14年3月刊)に発表してきた。本パネルは、その研究成果を踏まえて、「身心変容技法研究」が「宗教研究」に何を問いかけるかを問題とするものである。

その問いは、研究方法(手法)と研究対象(内容)に分けられる。研究方法としては、「身心変容技法」に関する文献研究・フィールド研究・臨床研究・実験研究がある。研究対象としては、祈り・祭り・元服・洗礼・灌頂などの儀礼、種々の瞑想・イニシエーション・種々の武道術などの修行やスポーツのトレーニング、歌・合唱・舞踊などの芸術や芸能、治療・セラピー、教育カリキュラムなどがある。これらの研究方法や研究対象を見ても、実に多様で多彩であることがわかるが、それゆえに、「身心」を軸とする横断的・超領域的な研究が可能となり、相互の各個別分野の研究を貫通する視座や基軸を提供することができる。本パネルでは、その全体像の描出と各論の掘り下げを試み、宗教研究の広がりや活性に一石を投じたい。

2. 個々の発表内容

最初に、本パネルのコーディネーターの鎌田東二が、総論として「身心変容技法研究が問いかけるもの」を描出する。可視化できる身体の領域から、目には見えないが感受できる心の領域、そして目にも見えず感受も不確かではあるが種々の宗教体験や宗教思想の中でリアリティを持つ霊の領域までをつなぐ「ワザ」としての「身心変容技法」を概括し、その日本における最初の文献記述である「神懸り」を取り上げる。神懸り

は『日本書紀』では「俳優(わざをぎ)」と言い換えられているが、それは単に演劇的な変身という意味以上に、「人に非ず優れたモノと成る(化す)超越のワザ」と解釈できる。それが神楽・鎮魂などの日本の芸能の起源伝承の一つである。人が神と成り、動物や植物や鉱物や物と成り、身心変容していく事例を整理しつつ身心変容技法の問題の枠組みを考察する。

次に、各論として、棚次正和が「身心変容技法としての祈り」を取り上げる。各宗教に見られる「祈り」を身心変容技法の根幹をなすワザと捉え、その生理的次元、心理的次元、霊(性)的次元の特質と関係性を考察し、心身問題を三元論から捉え返す。

続いて、津城寛文が「身心変容技法を心霊研究圏内から考える」と題して、「心霊研究」の方法と領域と問題性の交叉するところをウィリアム・ジェームズやベルクソンの「心霊研究」との関わりを含めて考察する。ジェームズの説いた死者個人の「センター」、「宇宙的貯水池」、「母なる海」などの概念を元に心霊研究が問いかけた死後存続の問題を考察する。

次に、鶴岡賀雄が「身心変容技法とキリスト教神秘主義」の問題を考察する。イエスの「身体」変容の諸相を基点に、古代のアウグスティヌス、中世～近世のテレサ、現代の動向などを通覧して、西欧キリスト教の「身心変容技法」の特徴を「比較宗教学」的に取り出す。とりわけ、十字架のヨハネの身心変容について取り上げる。

最後に、井上ウィマラが「身心変容技法とマインドフルネス」を取り上げ、脳科学的研究の視点を交えて考察する。井上は何度もマインドフルネス瞑想中の脳波測定をしている。その実験データを元に瞑想時の脳の状態の解析と、それが宗教研究に投げかける問題射程を考察する。以上の総論・各論の発表を踏まえて参会者と活発な議論を試みたい。

宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連

研究プロジェクトの概要	代表者： 松島 公望
宗教的自然観と精神的健康との関連	松島 公望 (東大)
スピリチュアル現象と精神的健康との関連	西脇 良 (南山大)
写経の実験的研究の試み	具志堅伸隆 (東亜大)
	中尾 将大 (大阪大谷大)
	コメンテータ： 森岡 正芳 (神戸大)
	司会： 松島 公望 (東大)

1998年にWHOにて健康の定義のなかのスピリチュアルに関する議論がなされたことを受けて、日本においても、宗教性／スピリチュアリティと精神的健康への関心は高まっている。欧米を中心に海外では、宗教性／スピリチュアリティが精神的健康に与える影響の大きさについて様々な研究で報告されているが、日本ではほとんど行われていないのが現状である。

そのような現状を受けて、2012年度より、「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連」の研究プロジェクト(科学研究費補助金・基盤研究(B), 課題番号: 24330185, 研究代表者: 松島公望)が始動した。

本パネル発表では、本プロジェクトの概要およびプロジェクトにて行われている研究を報告する。それらを基に、日本における宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の意義や可能性について検討し、実証的宗教心理学的研究からの提案を行いたいと考えている。

発表1: 研究プロジェクトの概要 松島公望

研究プロジェクトでは、宗教性／スピリチュアリティと精神的健康との関連について実証的に検討することを目的としている。その目的を達成するために、[1] 数量的研究班、[2] 質的研究班の2つ班を設置した。数量的調査では質問紙調査を行い、質的研究ではフィールドワークおよび面接調査を行った。本報告では、プロジェクトの全体像を示し、プロジェクトの意義について言及したい。

発表2: 宗教的自然観と精神的健康との関連 西脇良

宗教的自然観は、宗教に無関心とされる日本人の宗教性をよりの確に捉えるための有効な指標と考えられる。宗教的自然観には、自然の偉大さを感じるといった対自然認識の側面に加え、壮大な自然にふれて己れの存在の小ささを思い知るといった対自己認識の側面もある。先行調査(西脇, 2004)および予備調査からは、対自己認識における精神的健康との関連が示唆されて

いる。宗教性の一指標である宗教的自然観と「精神的健康」とは、どの地点でどのように交差しているのだろうか。今回のプロジェクトでは、両者の関連について、さらに追究していきたい。

発表3: スピリチュアル現象と精神的健康との関連 具志堅伸隆

スピリチュアリティのテーマは、これまで欧米を中心に研究が行われており、キリスト教やユダヤ教の影響を色濃く受けた内容となっている。具志堅(2009, 2011), 具志堅ら(2013)は、日本人のスピリチュアリティを捉える切り口として、日本社会の中で広がりを見せているスピリチュアルブームに着目した研究を行い、「スピリチュアリティ的信念尺度」、および「スピリチュアル現象尺度」を作成した。本報告では、上記の研究概要を紹介し、スピリチュアリティと宗教観、精神的健康との関係について検討する。

発表4: 写経の実験的研究の試み 中尾将大

発表者は日本人における一般大衆の宗教的行動や信仰心に関心を示し、主に仏教・浄土教を中心に研究を進めてきた。仏教の行法の1つに経典を筆で書き写す「写経」がある。これまでの研究から、写経には人間をして精神的安寧をもたらせたり、集中力を高める効果があることが分かっている。発表者はこれまで写経行動にまつわる心理的効果や行動についてモデルや仮説を提案してきた。本発表ではこれまでの研究のレビューをおこない、次の研究段階としての写経中の脳波や心拍などの生理的反応を測定する実験的研究の可能性について述べたい。

聖地における「聖性」の多元化とその葛藤をめぐって

代表者： 山中 弘

- 「聖性」の多元化と葛藤をめぐって—長崎教会群を事例にして— 山中 弘 (筑波大)
- 逆転する表舞台と裏舞台—青森県新郷村の聖地観光をめぐる語り— 岡本 亮輔 (聖心女子大)
- 聖地とロッククライミング—岩を守る人々と登る人々の論理— 天田 顕徳 (筑波大)
- 200円の聖地—観光化に伴う斎場御嶽の入場管理と公共性— 門田 岳久 (立教大)
- 司会： 山中 弘 (筑波大)

聖地や巡礼が、それらを管理する制度宗教の公的な意味づけから離れて、そこを訪れる人々によって自由に解釈されるようになっていたり、メディアやツーリズムなどの商業的な文脈の中で活用されるといった現象が目立つようになっている。サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路に「信仰なき巡礼者」があふれ、四国遍路でも、伝統的な大師信仰に関心を持たない若者たちの自分探しの「歩き遍路」が出現するようになってきている。こうした状況は、古典的世俗化論が予言したような宗教の衰退の極北を象徴しているのだろうか、それとも、後期近代社会に認められるとされる諸領域の脱分化に伴う、宗教領域とその他の領域との融合といった新たな聖性探求の表現なのだろうか。現代社会における「聖性」の行方を考える場合、こうした問題をどのように捉えるべきなのかは極めて重要な意義を有しており、本パネルは、この課題を「宗教とツーリズム」論の射程から読み解いてみようという問題意識をもっている。

さて、「宗教とツーリズム」論の一つの学問的意義は、今日の聖地・巡礼の状況にツーリズムという補助線を入れることで、これまで宗教研究では正面からあまり論じられてこなかった、宗教の「商品化」「市場化」「消費」という問題系を明らかにしたということである。この論点は、現代宗教の動態をマクロ的に考える上で不可欠なものといえるが、それぞれの地域において商品化、市場化の形態が多様なものである以上、よりミクロなレベルでの詳細な検討が必要となってくる。そこで、本パネルでは、パッケージ化された観光商品に組み込まれた聖地や、ユネスコなどの公的な機関によって貴重な宗教遺産だと認定された宗教(文化)が、現地においてどのように受容(消費)、統制され、それが現地に埋め込まれていた伝統的な宗教実践や聖性とどのような葛藤やコンフリクトを生じているのかという問題を検討したいと考えている。つまり、観光的に表象された聖性、公的に定義された聖性、現地を訪れるツーリストの懐く聖性、現地の人々に伝承・共有されてきた聖性といった、様々な聖性の多元的なあり方が、現地で複雑で多様な関係性を取り結んでおり、そ

うした状況を丁寧に論ずることで、マクロ的視点からは「宗教の観光資源化」という言葉で整理してしまいがちな聖地や巡礼の今日の状況を検討し、宗教という多面的で複合的な現象のダイナミズムの一端を明らかにできるのではないかと考えている。

以上のような意図と目的を達成するために、本パネルは以下の4つの発表から構成されている。

・山中弘は、これまで論じられてきた宗教とツーリズムに関わる議論を整理し、長崎の教会群の世界遺産化を事例に使いながら、論ずべき問題系の所在を明らかにする。

・岡本亮輔は、青森県新郷村にあるキリストの墓の事例を引き合いに出しながら、観光振興で使われるキリストの墓やピラミッドと、従来から村に伝承されてきた伝統や習俗の屈折した関係を、「偽の聖地」と「本物の伝承」の位置づけをめぐるホスト社会の動きとして報告する。

・天田顕徳は、2012年に世界遺産「那智の滝」を登った登山家が逮捕された事件をはじめとする幾つかの事例をもとに、岩を神道的なご神体として信仰する人々と岩のもつ形状や美しさに聖性を感じて登る人々の「岩」へのまなざしの相違をめぐるコンフリクトや融和を報告し、岩にまつわる聖性の多元的なあり方を考察する。

・門田岳久は、人類学的な観点から、近年観光客が急増する沖縄の聖地・斎場御嶽を取り上げる。そこでは観光客抑制のために入場料や休息日を導入したり、「男子禁制」が構想されたりしているが、聖域への入場制限策は文化遺産となった聖地の公共性といかに両立しているのかを考察する。

宗教メディアの近代

	代表者：	大谷 栄一	
活版印刷術の普及と仏教系出版社	引野 亨輔	(千葉大)	
宗教メディアとしての雑誌・結社・演説	大谷 栄一	(佛教大)	
宗学研究室の情報発信—仏教系学術雑誌の歴史と実態—	江島 尚俊	(大正大)	
東京府神職会会報にみる近代の神社と神職	藤本 頼生	(國學院大)	
	コメンテータ：	櫻井 治男	(皇學館大)
	司会：	大谷 栄一	(佛教大)

(1) 本パネルの位置づけ

発表者たち(大谷・江島・引野・藤本)は、2011年4月より、共同研究「近代宗教のアーカイブ構築のための基礎研究」(代表者：大谷、科学研究費補助金・基盤研究(B)、2011-2014年度)のメンバーとして、近代日本宗教史に関する調査・研究を進めている(現在、メンバーは25名)。

本共同研究の目的は、近代日本宗教に関する一次資料のアーカイブを整備し、それらの資料を分析した上で、近代日本宗教史研究の進展に貢献するための基礎研究を行うことである。この目的を実現するため、現在、仏教系と神道系雑誌の目次データベースの作成作業を行うとともに、近世・近代の仏教系出版文化と国際的な仏教ネットワークに関する資料の調査・研究を実施している。

本パネルは、この調査・研究の最終報告というべき位置づけを持つ。

(2) 本パネルの目的

本パネルの目的は、宗教メディアに注目して、近代日本宗教史に関する新たな知見を提示することである。近代以降、「宗教」に関する知識や学知を伝えるために、さまざまなメディアが用いられた。新聞・雑誌・書籍という印刷メディア、演説・講演というパフォーマンス、結社や大学という組織・制度など、数多くの宗教メディアが新たに生み出された。そうした宗教メディアがどのように誕生し、どのように活用されたことで、宗教界や一般社会に何がもたらされたのかを検討してみたい。

とくに、仏教系出版社、仏教系学術雑誌、神職会会報、仏教系雑誌・結社・演説を取り上げ、報告することで、近代日本宗教史における宗教メディアの役割を分析するとともに、宗教メディアと近代の関係について考察する。

(3) 発表者の報告内容

各発表者の報告内容は、以下の通りである。

引野報告：一般的に言えば、活版印刷術は安価な書物の大量生産を可能にし、圧倒的な力で近代社会に定着していったとイメージされている。しかし、本発表では、東京や京都の仏教系出版社を取り上げ、どのような思想・情報を伝達するために活版印刷術が新たに採用され、また木版印刷術が活用され続けたのか、新技術導入のより具体的で複雑な様相を明らかにする。

大谷報告：明治期の仏教者や仏教団体が雑誌・結社・演説という宗教メディアをどのように活用して活動を行ったのかを分析する。また、キリスト者やキリスト教系団体のメディア活用にも言及することで、明治の宗教文化の特徴についても考察する。

江島報告：本発表では、宗門系大学(もしくは宗門系専門学校)に設置された宗学研究室が主体となって編集・発行をしていた学術雑誌に焦点を当てる。大学内に設置された宗学研究室という極めて近代的な空間が、如何なる目的で学術雑誌を編纂し、どのような情報発信を行っていたのかについて報告する。

藤本報告：明治後期以降、各地で発刊された地方神職会会報の一つである『東京府神職会会報』を取り上げ、地方の神職レベルにおいて作成された宗教メディアが近代における地方神社や神職の動き、あるいは中央から地方へと伝達された法令などの制度受容がいかになされたのかを窺うことで、神職会会報の性格と役割について考察する。また、『東京府神職会会報』以外の地方神職会報にも言及することで、各地の地方神職会会報の成立期にあたる大正期以降のいわゆる国家神道成立期とされる神職や神社が、社会といかに関わっていたのか、関わろうとしていたのかについて、これまでの言説とともに、宗教メディアという観点から再検討を試みる。

新しい宗教研究の地平を拓く―「実践」という場から―

代表者： 弓山 達也

宗教性と学術研究との連関を考え直す	島菌 進 (上智大)
世代間交流と被災地支援が産み出すスピリチュアリティの教育	弓山 達也 (大正大)
宗教者と研究者の複眼で現場に立つ	小川 有閑 (国際宗教研究所)
宗教間対話から現代宗教を見直す	武藤 亮飛 (筑波大)
宗教研究における実践論的転回の可能性―自己・身体・瞑想―	檜尾 直樹 (慶大)
司会：	弓山 達也 (大正大)

■企画の要約と意義

1995年のオウム真理教による地下鉄サリン事件以降、研究対象へのデータタッチメントが主流となった宗教研究において、近年、コミュニティや被災地等における活動を足がかりとして、対象接近型の研究が見られるようになってきた。宗教者や地域活動家との協働を通して現場と向き合い、自らの宗教研究を模索しているともいえよう。このことは福祉学や教育学などで用いられるアクションリサーチの手法が斯界にも広がりつつあるとも考えられる。

また教団活動に身を置き、あるいは宗教者との対話や己の身体を通して、宗教や霊性の理解の途を探ろうとする潮流も現れつつある。先のオウム事件以前には身体的理解と呼ばれ、その後、霊性交流の場では重きが置かれているものの、アカデミズムでは洗練されることなく捨てられた感のあるアプローチ法の再評価と見ることができるかもしれない。

いずれにせよ、かかる広い意味での「実践」を前提・基盤とした接近方法や立場は、必ずしも自覚的に検討されておらず、本学会において議論の俎上にあげていくことが意義のあることと考えられる。そこで本テーマセッションでは、(1)島菌が東日本大震災後の全体社会との関わりから、(2)弓山が世代間交流や被災地支援を通してのコミュニティとの関わりから、(3)小川は研究者であり実践者であるという立場から、(4)武藤は新日本宗教団体連合会等での経験を踏まえ教団と教団との関わり(あるいは、教団間の関わり)から、(5)檜尾が比較行法を通じての自己・身体との関わりから、この問題を検討し、新しい宗教研究の地平を拓く作業に着手したいと考えている。

■個々の発表内容

[島菌] 人類文化の中で宗教的なものがどう表れているかを理解しつつ、自己自身の宗教との関わりを考え直すことを続けてきたが、2011年3月11日以降、学術研究と宗教性が交わる領域での仕事が増えた。直接的には東日本大震災が起り、続いて2013年4月よ

り上智大学グリーンケア研究所の所長という職についてという個人的事情がある。しかし背後には、「社会における宗教性の空白」を問い、それへの適切な応答を探求するという動機がある。

[弓山] 報告者は2010年以降、コミュニティスペースに常駐し、また地域の生涯教育との連携をはかり、世代間交流をサポートし、同時に被災地におけるボランティア・スタディツアーのプログラム作りと引率を行ってきた。そこでの参加者の琴線(価値観や感情)に触れる体験が、生きる力や希望を見つけ出そうとするスピリチュアリティの教育となっていることを示し、宗教研究の拡がりを示唆していく。

[小川] 報告者は「自死・自殺に向き合う僧侶の会」に所属し、希死念慮者・自死遺族との相談活動に従事する一方で、自死対策に関わる僧侶の活動を研究対象ともしている。宗教者(実践者)と研究者、二者の立場で現場に関わることの葛藤や長所・短所を整理し、宗教研究の可能性を検討する。

[武藤] 「宗教を理解する」という宗教学の古くからの営みが、宗教間対話では模索されている。しかし、「学び合い」や「相互理解」といった言葉は多義的であり、そこでの「理解」のあり方は多様である。宗教学においても同様に、何をもって宗教を「理解」したと考えるかは、多様である。対話や霊性交流など様々な教団間での取り組みの検討を通して、また宗教研究の前提を再考することで宗教理解の多様性を整理する。

[檜尾] ポストモダニズムの文脈における宗教研究では言説を仔細に点検する方法が評価されるが、それで宗教を理解したことになるか。むしろ教えや体験を語る言葉の背後にある前言語的な体験から出発すべきだろう。体験を正当な資料とするには体験の場である身体とその実践に着目する必要がある、この点で研究主体も問われる。本発表では身体性・宗教実践としての瞑想・自己性を鍵概念としながら宗教研究の実践論的転回の可能性を提起する。

2014年7月9日発行

編集・発行 日本宗教学会 第73回学術大会 実行委員会
〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
同志社大学 神学館 1階

E-mail: jars2014team@gmail.com

HP: <http://jars2014.wordpress.com/>